

スポーツマンシップとは何か？

谷釜尋徳¹⁾，渡邊瑛人²⁾

What is Sportsmanship?

TANIGAMA Hironori & WATANABE Akito

1. 知っているけど説明できない“スポーツマンシップ”

スポーツの世界では、パフォーマンスの向上だけではなく、倫理観や道徳観も重要視されている。スポーツ界で問題が起こるたびに“スポーツマンシップ”という言葉が登場するが、その意味するところは意外と知られていない。そこでこの小論では、スポーツマンシップという言葉の意味を、歴史的な視点から確かめていくことにしたい。

「われわれ選手一同は、スポーツマンシップにのっとり、正々堂々と戦うことを誓います！」

このような一文を耳にしたことはないだろうか。スポーツの競技大会でお馴染みの選手宣誓文の一例である。それでは、文中に登場する“スポーツマンシップ”とはどういう意味なのか？こう尋ねられると、答えに困ることも少なくないは

ずである。

実際に、筆頭著者が担当している授業でスポーツマンシップに関する調査を実施したところ、221名中、スポーツマンシップという言葉を知っていたことがある」と答えた学生は215名にのぼる一方で、その内容を「説明できる」という回答はわずか2名にとどまった(図1)。つまり、大半は、スポーツマンシップの意味を知らないままに、この言葉を使っていることになる。

スポーツマンシップという言葉の意味を国語辞典に尋ねてみると、「正々堂々と公明に勝負を争う、スポーツマンにふさわしい態度」(『広辞苑 第7版』岩波書店、2018)、「スポーツマンの備えているべき精神」(『大辞林 第3版』三省堂、2006)などと記されている。スポーツマンシップの本質に迫るためには、スポーツそのものの意味にまで遡る必要があるであろう。

2. 近代イギリスのジェントルマンとスポーツ

多くの近代スポーツを生み出したイギリスで

1) 東洋大学スポーツ健康科学(白山キャンパス)研究室 〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

2) 日本体育大学大学院 〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-1-1

Graduate School of Health and Sport Science, Nippon Sport Science University, 7-1-1, Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo, 158-8508, JAPAN

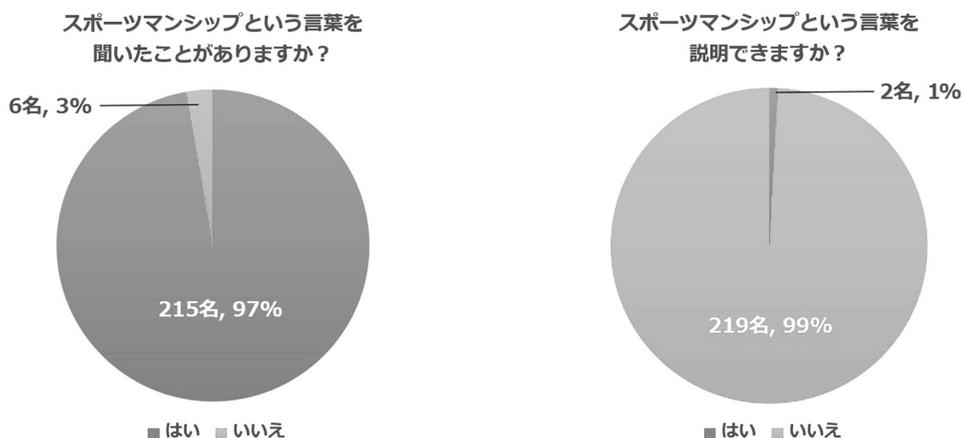


図1 スポーツマンシップに関する調査結果

2018年度 東洋大学法学部「スポーツ哲学」の授業内において調査を実施（回答者221名）

は、19世紀初め頃までの“スポーツ”とは、主にジェントルマン（支配階層）が行う狩猟のことを指していた。そもそも、「スポーツ」(sport)の語源はラテン語の“deportare”だと言われるが、これは、ある所からある所への「運搬」「移動」「転換」などを意味していた。それが17～18世紀になると野外での狩猟や自由な活動を指すようになり、19世紀になってようやく、今日の意味に近い競技的なニュアンスが加わるようになったのである。

こうして、ジェントルマンのスポーツ活動の意味するところは、狩猟から運動競技にまで拡大していくが、その根底には“騎士道の精神”があった。それは、ジェントルマンの多くが中世の騎士を祖先に持っていたからである。

一般的に、中世において重んじられた騎士道の精神とは、表1のように表現されている。近代のジェントルマンたちは、このような祖先のスピリッツを受け継いでスポーツをしていたのである。

近代オリンピック史上初の選手宣誓（1920年のアントワープ五輪）で、開催国ベルギーのフェンシングの選手は高らかに「我々は…競技規則を守り、騎士道精神にのっとり、祖国の名誉と競技

表1 中世の騎士道の精神

・奉仕	（キリスト教の教えを信仰する）
・忠義	（君主に忠誠を示す）
・公正	（弱者とともに生きる）
・勇氣	（どんな場面でも強者に立ち向かう）
・武芸	（戦闘能力を鍛える）
・慈愛	（社会的弱者に対して愛情を持つ）
・寛容	（誰にでも平等に与える）
・礼節	（目上の者を敬い、目下の者を侮らない）

山本博文『武士道と日本人の心』青春出版社、2015より作成

の栄光のために戦う」という誓いを立てたという（『読売新聞』2016年7月13日付、朝刊）。それは、近代スポーツそのものが騎士道の精神と関わって発展してきた歴史とも関係があったのである。

ちなみに、今日のオリンピック競技大会の開会式の宣誓文には、“スポーツマンシップ”という言葉が使われている。

3. パブリックスクールにおけるスポーツマンシップの誕生

将来の大英帝国を担うジェントルマンの子弟は、パブリックスクールに入学することが慣わしだった。この寄宿舎制の学校では、スポーツによ



図2 14世紀にロンドンの街路で行われていたフットボール
 マグーン著、忍足欣四郎訳『フットボールの社会史』岩波書店、1985より転載

表2 近代のパブリックスクールが生んだスポーツマンシップの内容

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・正々堂々とプレーせよ。 ・勝利よりもゲームのためにプレーせよ。 ・ルールを守れ。 ・審判を尊重せよ。 ・よき敗者であれ。 ・勝利を喜ぶ前に敗者に礼儀正しくふるまえ。 ・他者が上達するよう手助けせよ。 ・観客として、すべてのチームのプレーを称賛せよ。 e.t.c. |
|---|

阿部生雄「スポーツマンシップ」『最新スポーツ大事典』大修館書店、1987より作成

る人間教育が重視され、スポーツをする上での倫理的・道徳的側面が強調されていく。例えば、元々は村や町の祭りだったフットボール（後にサッカーとラグビーに分岐）では、殴る、蹴る、つかむといった行為が平然と行われていたが（図2）、その無秩序の荒々しさはパブリックスクールのエリート達には相応しくなかった。

そのため、立派なジェントルマンを育成すべく、暴力を抑制するために“ルール”が生まれる。ちょうど、イギリスでは暴力に頼らずに権力を譲渡するシステム（議会制度）が発達するな

ど、非暴力化の考え方が進んでいった頃でもあった。さらには、多くの人が地域を越えて一緒にフットボールを楽しめるようにと、各地の学校でばらばらに定められていたルールの統一化も図られていく。

こうして騎士道の精神をバックグラウンドにしながら19世紀中頃に誕生した倫理的な規範が、今日に連なる“スポーツマンシップ”だった。当時、イギリスを中心に重視されていたスポーツマンシップの内容とは、表2のようにまとめることができる。

表3 ストレンジが説いたとされる立派なスポーツマンの条件

- ・時間を守れ。
- ・全力を尽くして負けるのはやむを得ない。勝敗だけにとらわれず、負けても毅然としていることが大切だ。
- ・卑怯な行動はせずに公明正大でいることが大切で、自分より強いものを師として学べ。
- ・ゲームそのものを楽しめ。
- ・審判に従え。
- ・スポーツによって人格が創られる。これは天からスポーツマンに向けての最高の贈り物である。

高橋孝蔵『倫敦から来た近代スポーツの伝道師』小学館, 2012より作成

結果としての勝敗だけにとらわれることなく、目の前のゲームに全力を尽くすこと、ルールを守って審判を尊重しながら正々堂々とプレーすること、そして何より、勝敗が決した後の態度こそが重要だとする考え方がそこにはあった。

戦前、イギリスのパブリックスクールで学んだ日本人（池田潔）が、その実体験からスポーツマンシップの本質を次のように説いている。どうやら、パブリックスクールが育んだスポーツマンシップとは、ずる賢い考えを持たずに対等な条件で正々堂々とプレーすることをいうようである。

「スポーツマンシップとは、彼我の立場を比べて、何かの事情によって得た不当に有利な立場を利用して勝負することを拒否する精神、すなわち対等の条件でのみ勝負に臨む心掛をいうのであろう。」（池田潔『自由と規律』岩波書店, 1949）

パブリックスクールのスポーツマンシップに影響を受けた人物の一人に、近代オリンピックの創設者ピエール・ド・クーベルタンがいた。彼はイギリスのパブリックスクールを視察した際、そこで行われていた学生の自主性を重んじたスポーツ教育を見て感銘を受ける。これをきっかけに、クーベルタンはスポーツの持つ教育力を信じてオリンピックを創設した。オリンピック誕生の背景には、スポーツマンシップの存在があったといっ

ても過言ではない。

4. 日本へのスポーツマンシップの伝来

明治の世の中になると、日本にも欧米産の近代スポーツが大量に持ち込まれる。そんな中で、日本人に最初にスポーツマンシップを伝えたと言われる人物が、ウィリアム・ストレンジである。イギリスのパブリックスクール出身のストレンジは、明治8（1875）年に英語教師として来日し、東京英語学校、東京大学予備門、第一高等学校の学生に、ボート、フットボール、ベースボール、陸上競技などのスポーツを熱心に教えた。課外活動としてのスポーツを重視し、今日の部活動や運動会の基礎を築いたことでも知られている。日本初のスポーツガイドブック“OUTDOOR GAMES”も出版した。

ストレンジは、スポーツが若者の人間形成に大いに役立つことを日本人に強く訴えかけた。ストレンジの功績を称えた回想録によると、彼はとある講演会で立派なスポーツマンになるための条件を説いたという（表3）。

5. 武田千代三郎の「競技道」

ストレンジの教え子の一人に、東大予備門時代にスポーツ指導を受けた武田千代三郎がいた。後に秋田、山口、山梨、青森で県知事をつとめ、日本のスポーツ界を牽引した人物で、「駅伝」の名

表4 武田千代三郎の「競技道（運動家の度量礼儀）」にみるスポーツマンシップ

- ・いつもフェアプレーをせよ。
- ・機敏に行動し、ずる賢く、臆病な人間になるな。
- ・勝利しても喜びすぎるな。
- ・敗北しても恨んだり嘆いたりするな。
- ・相手を見下すな。
- ・天運に甘んぜよ。
- ・スポーツは、人格者同士の競い合いである。
- ・相手は自分の良き先生であり、良き友人である。
- ・いつも礼儀正しくふるまえ。

武田千代三郎『競技運動：理論実験』博文館，1904より作成

表5 『スポーツマン綱領』にみるスポーツマンシップ

- ・競技するものは、スポーツを愛好し、ひいてはそれを心と身体の糧とし、明るい光とすがすがしい空気なかで、純粹にスポーツを行うこと。
- ・競技するものは、スポーツを行うことによって、社会的な名声や、物質的な利益を得ようという考えをもたないこと。
- ・競技するものは、審判の判定を重んじ、その決定に満足しない場合でも、感情に支配されぬ行動をとること。
- ・競技するものは、常に明朗で相手を尊重しつつ自分の最善をつくし、その結果に満足すること。
- ・競技を審判するものは、規則に従って公正に判断し、競技を明るく、滑らかに進めること。
- ・競技を見るものは、感情にとらわれた応援をせず、美しい精神とすぐれた技をたたえ、スポーツのよりよい発展を希うこと。

日本体育協会編『日本体育協会五十年史』日本体育協会，1963より作成

付け親としても有名である。

武田は、ストレンジから教わったスポーツマンシップに影響を受けて、これを武士道とも関連付けながら「競技道」という呼び名で日本に普及させようと試みる。著書『競技運動』の中で展開された武田の「競技道」は7項目にわたり、そのすべてがスポーツマンシップに通じるものだが、ここでは特に「運動家の度量礼儀」という項目に着目してみたい。そこには、表4のようにフェアプレーをはじめとする倫理的な内容が説かれている。武田がストレンジから教え込まれ、自ら練り上げたスポーツマンシップ（競技道）とは、今日のスポーツ界においても十分腑に落ちる内容を含んでいる。

6. 戦後のスポーツマンシップ

戦後、日本国内で国民を挙げてスポーツ振興を図る機運が高まると、アマチュアスポーツ界における一つの指針として、スポーツマンシップの内容を明確化する動きがあらわれる。やがて、昭和24（1949）年に首相官邸でスポーツ振興会議が発足する。同会議において日本体育協会（現在の日本スポーツ協会）を中心に案が練られ、昭和30（1955）年に発表された倫理規程が『スポーツマン綱領』である。

そこでは、前文において「競技場にあるとおなじ精神と態度で生活し、りっぱな社会人でなければならぬ。」と説かれ、スポーツが人間形成の

表6 広瀬一郎が提唱したスポーツマンシップ

- ・規則（ルール）にしたがう。
- ・相手を尊重する。
- ・勝利のために最善の努力をする。
- ・良い試合をする。
- ・負けても相手を称え、落胆せずに次に備える。
- ・チームの良き一員として、協調し助け合う。
- ・審判を尊重する。
- ・フェアプレー（ルール違反をしない）を心掛ける。

広瀬一郎『スポーツマンシップを考える』小学館, 2005より作成

手段であることが改めて強調された。

『スポーツマン綱領』の項目は表5の通りである。ところどころ抽象的な表現が目立つが、戦後、再び日本が国際スポーツ界に打って出ようとした時代、政治的な意図も含んでスポーツマンシップの存在とその内実が目が向けられたことを確認しておきたい。

7. 現代のスポーツマンシップ

最後に、現代において提唱されたスポーツマンシップの内容を見ておきたい。日本にスポーツマンシップを普及させるべく尽力した広瀬一郎は、著書『スポーツマンシップを考える』の中で、表6のような項目を説いた。広瀬によるスポーツマンシップは、19世紀のイギリス人が生み出したスポーツの倫理観と重なっている。私達が大切にすべきスポーツマンシップとは、時代に左右されない普遍性を持って今日に受け継がれてきたといえよう。

また、アメリカの事例になるが、トンプソンは『ダブル・ゴール・コーチングの持つパワー』（原題は“The Power of Double-Goal Coaching Developing Winners in Sports and Life”）において、スポーツマンシップがより強力になった形として「試合への敬意」をあげている。それは、“ROOTS”を頭文字とするいくつかの項目（振る舞い）によって成り立っているという（表7）。

現代においてスポーツマンシップを考える際、この“ROOTS”はプレーヤーやコーチをはじめ、スポーツに関わる者にとって示唆に富んだ枠組みを提供している。

表7 「試合への敬意」の基本となる“ROOTS”

Rules	(ルールへの敬意)
Opponents	(相手への敬意)
Officials	(審判への敬意)
Teammates	(仲間への敬意)
Self	(自分自身への敬意)

上記の“ROOTS”に対する敬意を持つことが大切

トンプソン著『ダブル・ゴール・コーチングの持つパワー』スポーツコーチング・イニシアチブ, 2016より作成

このように、イギリスのジェントルマンの世界観が生み出した“スポーツマンシップ”は、長い間、スポーツの価値を倫理的・道徳的な側面から支え続けてきた。

本小論は、従来スポーツマンシップとして示されてきた事柄を網羅し得たものではない。各々の時代におけるスポーツマンシップの意義や批判的検討は別稿に譲ることにして、ここでは近代に誕生した競技スポーツとスポーツマンシップが、今日に至るまで強固な関係を結んできたことを確認しておきたい。

スポーツマンシップの内容に国や時代を越えた共通項が見出せるという事実は、近代スポーツの

世界では、選手の取るべき行動やマインドセットに一貫して受け継がれてきた“理想像”が存在することを意味しているのかもしれない。しかし、言い換えれば、スポーツマンシップが強調され続けるということは、示されてきた事柄に反するスポーツマンが後を絶たないことも同時に意味しているといわねばならない。スポーツに関わる倫理規範を誰しもが当然のように遵守できるなら、わざわざスポーツマンシップを条文のようにして掲げる必要などないからである。

もし、スポーツマンシップがスポーツ界から消え去ると、スポーツを通じて感動を覚える人は誰もいなくなってしまうのだろうか。あるいは、あえて穿った見方をすれば、スポーツマンシップは、スポーツ界の“闇”から大衆の目を遠ざけるための隠れ蓑の役割を図らずも担ってきたことになるのだろうか。

現在のスポーツ界の実態を肯定するにせよ、否定するにせよ、スポーツマンシップは『スポーツとは何か？』という根本的な問いを立てるための一つの枠組みを、私たちに提供している。

〔付記〕

本稿は、『2020からスポーツを見つめ直す—スポーツの

本質とそのひろがり—』（東洋大学2020東京オリンピック・パラリンピック連携事業推進委員会、2019）に掲載された拙稿「スポーツマンシップとは何か？」に、共著者の渡邊氏の協力を得て大幅な加筆および修正を施したものである。

<参考文献>

- ・ 武田千代三郎『競技運動：理論実験』博文館、1904
- ・ 池田潔『自由と規律』岩波書店、1949
- ・ 日本体育協会編『日本体育協会五十年史』日本体育協会、1963
- ・ 渡辺融「F.W. ストレンジ考」『体育学紀要』7号、東京大学教養学部体育研究室、1973
- ・ マグーン著、忍足欣四郎訳『フットボールの社会史』岩波書店、1985
- ・ 阿部生雄「スポーツマンシップ」『最新スポーツ大事典』大修館書店、1987
- ・ 岸野雄三「武士道とスポーツマンシップ」『体育の科学』40巻2号、1990
- ・ 多木浩二『スポーツを考える』筑摩書房、1995
- ・ 広瀬一郎『スポーツマンシップを考える』小学館、2005
- ・ 松村明編『大辞林 第3版』三省堂、2006
- ・ 阿部生雄『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会、2009
- ・ 高橋孝蔵『倫敦から来た近代スポーツの伝道師』小学館、2012
- ・ 山本博文『武士道と日本人の心』青春出版社、2015
- ・ トンプソン著『ダブル・ゴール・コーチングの持つパワー』スポーツコーチング・イニシアチブ、2016
- ・ 『読売新聞』2016.7.13（朝刊）
- ・ 新村出編『広辞苑 第7版』岩波書店、2018